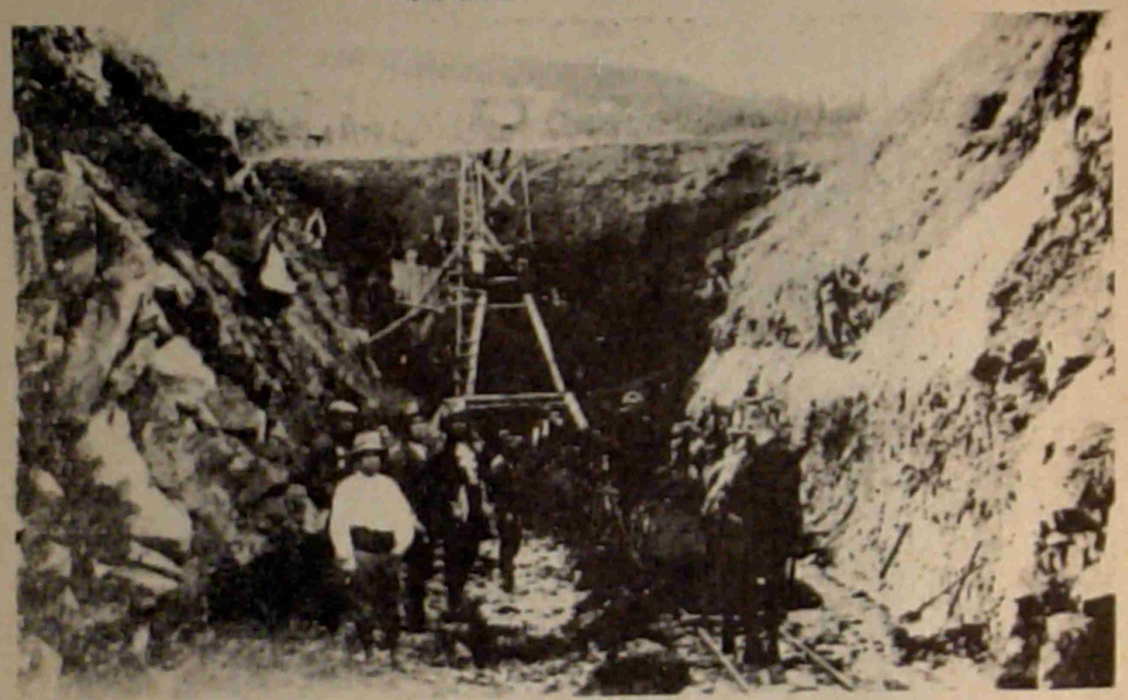
夜久野隧道東坑門口（明治43年）



＜人夫出しの育成＞

先に、建設業者は皆「人夫出し」だったと書いたが、これは政府がすすめたものである。

明治の初めの神戸開港により、近畿一円より、没落士族や農民が神戸新開地に集まり、神戸は町中、浮浪者であふれていた。政府はこれをみて、阪神間鉄道工事（明治四年）を人夫出しを使わず、自分の手で人夫を集めて費用を安くしようとした。しかし、

「即ち役人の募集した人夫は浮浪の徒で、役人の面前に於てのみ勤労を装い、労働に熱意がないから、能率揚がらず、工程遅々として徒に工費を増すの不成績であった。此の見地より井上（鉄道）局長大いに悟る処あり、鉄道建設工事を円滑有利にすすめるにはどうしても請負業者の力に俟たねばならぬ、それには業者を相当に指導し擁護し、発達せしむることが肝要であることを痛感した。」　（菅野忠五郎「鹿島組史料」より）

つまり、

「少しけんか、うでの立つ男で顔のうれている男は、働かなくともなんだかんだといって、よわい者をいじめて金をまきあげてバクチや、女買いにうき身をやつしていた男が多かった。工事請負った親方は、この種の男を

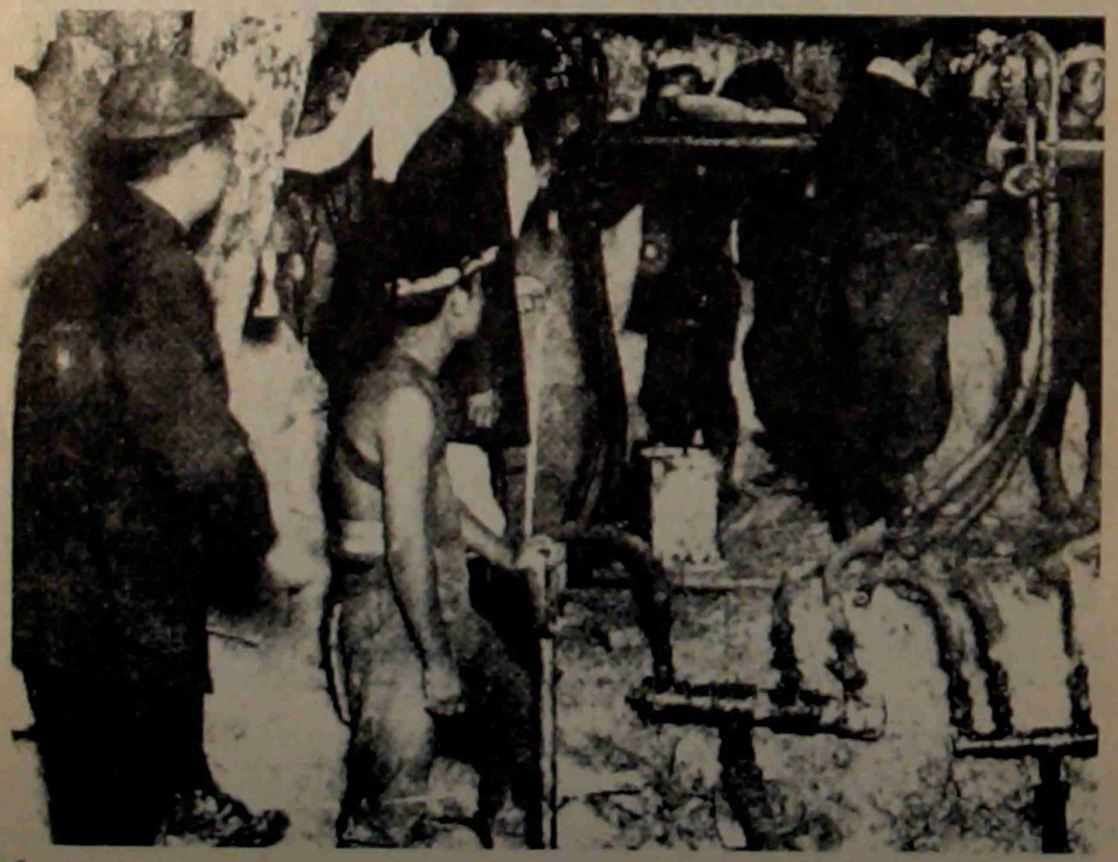
高給で抱えて、職人が賃金の値上げを要求した時は、この種の男にうでづくで職人をおさえつけて値上げに応じなかったものである。これをとなえて、職人一般はこんな男を、グズリおさえ、二分五厘と呼んだものである。」

（辻アイ「母ちゃんが書いた―お前たちに遺す私の歴史」昭和三四年刊　より）

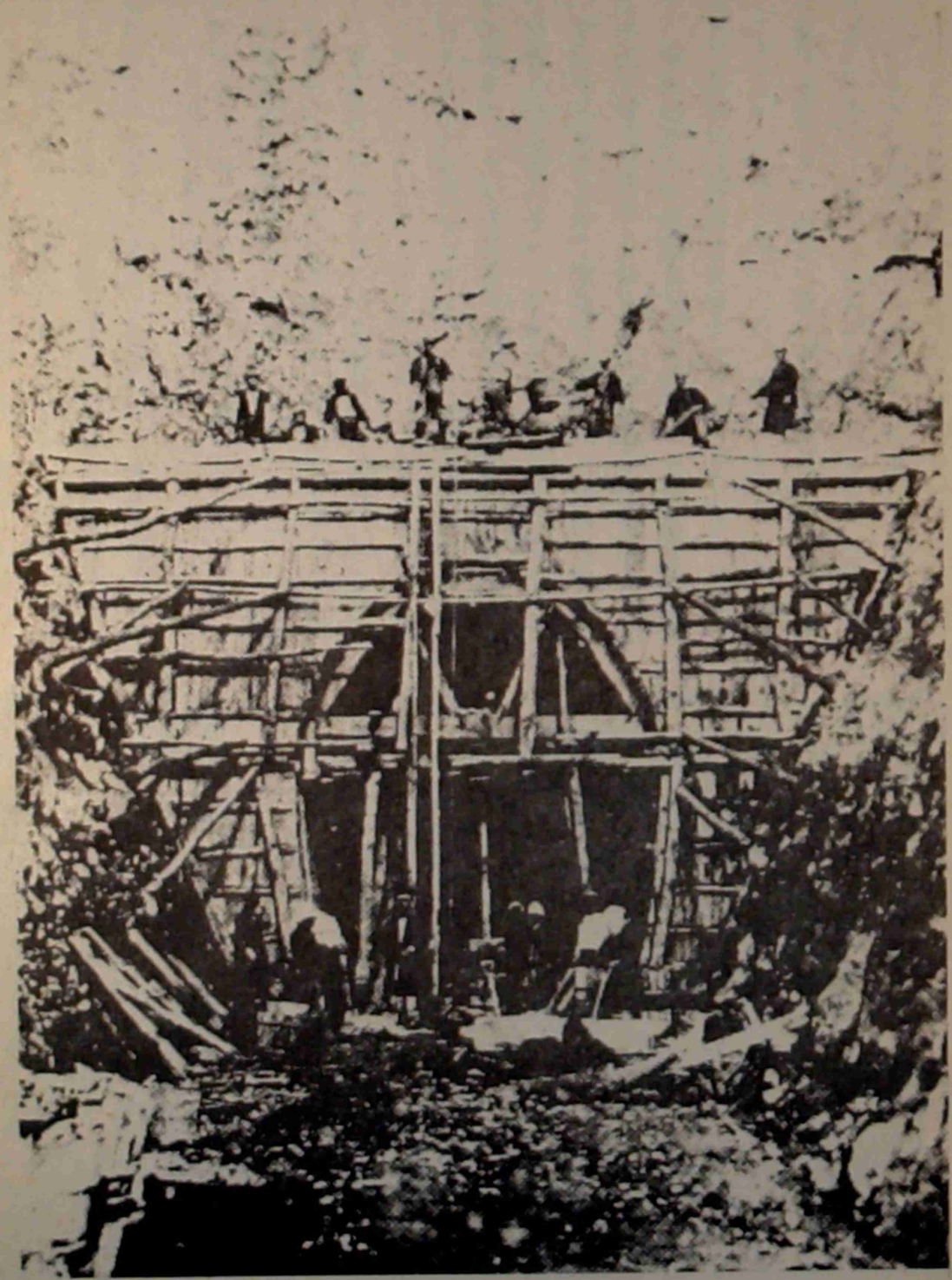
＜囚人労働とタコ部屋＞

鉄道は全国にのびていった。しかし北海道ではなかなか人が集まらない。先住民族「アイヌ」は既に江戸時代日本人の侵略に敗北し、半ば以上殺されており、労働力として使うことも不可能なほど減少していた。こうして政府は北海道での開発（道路、鉄道、港湾建設、炭鉱、鉱山）工事に、三井三池炭鉱のように囚人を使う事を思いつき、全国から重罪人を北海道に集めて、強制労働をさせた。これが監獄部屋の始まりである。（網走刑務所もこの時、このために作られた）しかし囚人労働はキリスト者を始めとして多くの反対が起り、又、政府としても管理に費用がかさむので民間にやらせることにした。

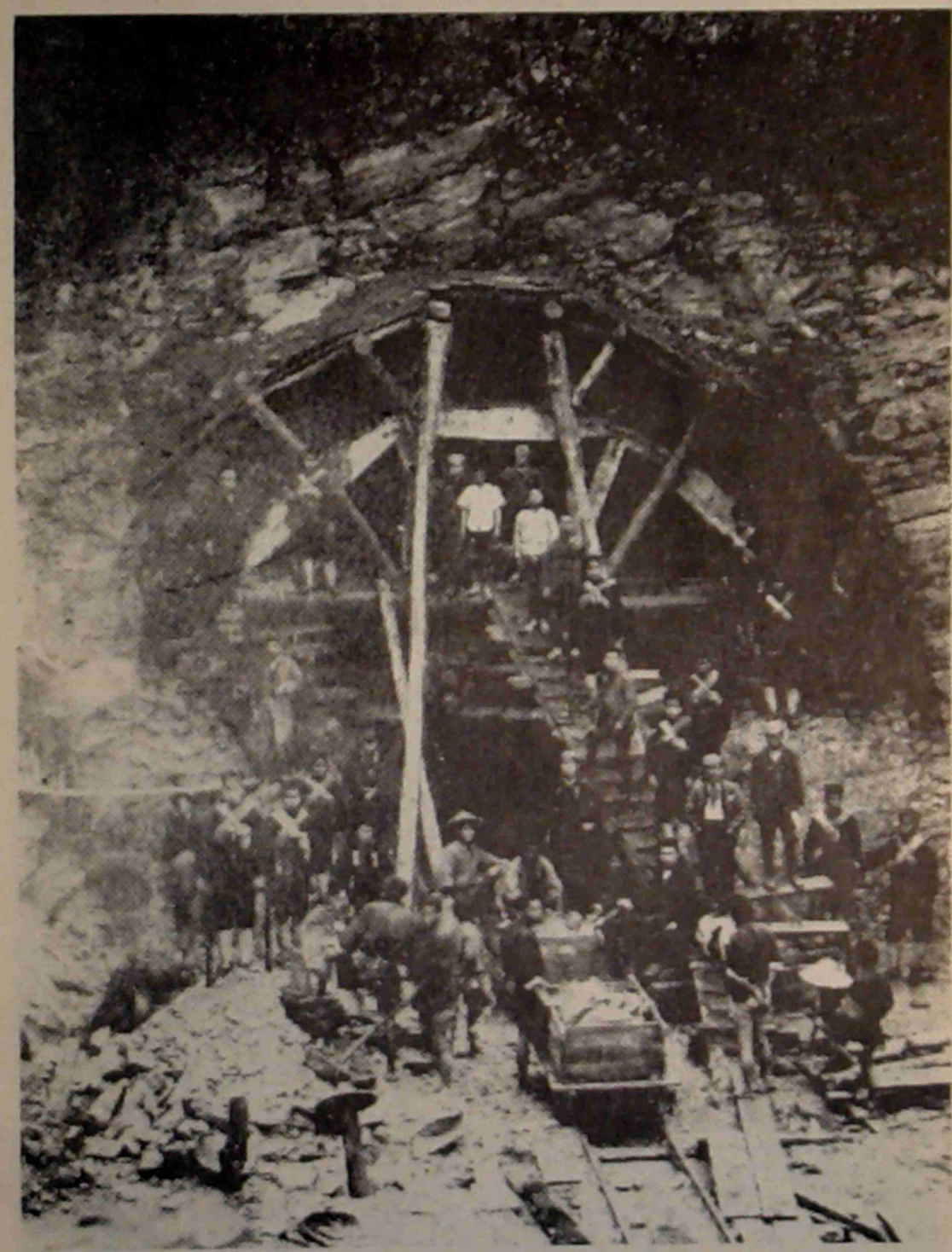
「政府、財閥からすれば、囚人に代れるものさえできれば、囚人労働廃止はさしつかえないのである。井上馨は議会で答弁している。〝北海道の幹線道路はほぼ完了



生駒隧道工事の現場（明治44年）



肥薩線工事（大正８～10年）



丹那トンネル現場（大正７年）

したし、政府直轄の労働に頼るより、企業にゆだねた方が、民間の資本、労働者が導入できて、開発に好都合である。と。ただし、三池の囚人労働が、その言明後も継続されているから言葉通りには受けとれないものがある。

民間資本と労働者の導入といえば聞こえはよいが、これが飯場制度や監獄部屋にほかならない。囚人労働の本質である拘禁性と低賃金をうけつぎ、企業の利潤を最大限に、暴力的に保障するのが監獄部屋であり、飯場制度であった。」

「北海道の監獄部屋は明治二十九年、官営の鉄道工事から始まる。」（小池喜孝「鎖塚 ― 自由民権と囚人労働の記録」昭和四八年刊　より）

「築港が埋立された。倉庫が立つ、レールが引かれる、文明が開けるという。しかしそこには「監獄部屋」によって、封建時代の「人柱」のそれが、一分一厘も違わずそのまま巧みな近代的な方法でちゃんとなされているのだ。

鉄道が開通した。国道が開けた。そういって提灯行列でもする。だがしかし、そこの土には生きた人間の血と骨が、うずめられているのだ」（小林多喜二「監獄部屋」より）

丹那トンネル開通を喜び合う関係者たち（大正6～7年）

一方、業者の方は何といっているか。

「懶ける者に鉄拳が舞い、横着者に鞭が踊る。決してむべき行為でない。人道的の手段ではないにしても、万事言説よりは実行一方の仕事場である。体力と動労を至上主義とする工事現場である。かかる事情に於ては誠に止むを得ない。寛如さるべき方法ではあるまいか。

（中略）不運にも是等元凶が捕えられた場合には極端な「見せしめ」が行なわれる。それは良くないことである。しかし北海道の如き警察力の行渡っていない自己の権益は自から防衛しうるの外に道なき未開地に於ては誠に止むを得ないことではあるまいか。（前出「鉄道請負業史」）

何といういいぐさか、止むを得ない、許されるべきではないかとヌケヌケといっている。この体質は今でも続いているようだ。（尚、小池氏は二十九年よりとタコ部屋のことを云ってるが、業界史は二十五年と述べている）

〈日清戦争の頃〉

「日清戦役（明治二十七年）の当時は寧ろ人夫があり余っていた。丁度その頃池の端切通の岩崎邸が建築されたが工費は恐らく今の二十分の一位で済んだであろうと云う。何となれば当時の人夫や鳶は安い賃金で今日の倍も働き、中には力自慢で、人を驚歎させることが面白くて、無料で奉仕的に働きに往く変り者もいたという。当時は六十貫（二二五キロ）からの重量物も二人で担いだが、今日では六十貫からの物は皆四人がかりで運ぶ。今日では同じ重量物が二人で担げるかと初めから問題にしない。往時は仮橋を架けるにも材料の重量と之が担ぎ人夫二人の体重を支え得る材料で事足りたが、今日では担ぎ人夫四人分の職員と体重とに堪える材料が必要になった。……昔の者は腕で仕事をし、腕で人を使ったが、今の者は頭で人を使い頭で仕事をしている。昔は機重機や捲上機が少ないので大低肩で仕事をした。井筒の荷重試験をするにも六十封度の軌条四人で担いでいつも駈足で積み卸したものである。此時へたばる様な無力者は弱虫と唾棄され、当日の賃金は仲間の人夫に没収されることもあった。」（「鉄道請負業史」）

〈明治三十年代〉

「篠ノ井の工事では人夫を集めることが相当困難であった。土地の者は余り集らず、大低渡り者が来た。その頃の土方には賭博と飲酒と喧嘩この三つは附き物であった。賭博をやらせなければ人夫が集らないのである。当時の土方は朝、昼、晩の三食の外に三時頃に更に一回の